

令和三年度 後期日程 文学部 日本・中国文学科
入学者選抜学力検査問題 国 語

〔注意〕

- 1 机上に受験票を提示しておくこと。
- 2 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- 3 解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所に入記入すること。
- 4 解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。
- 5 この冊子の問題は十二ページ、解答用紙は一枚からなっている。
- 6 この冊子のうちに落丁・乱丁または印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。
- 7 この試験の満点は百点であるが、科目配点に応じて三百点満点に換算する。
- 8 字数制限のある解答では、句読点や括弧なども字数に含める。
- 9 問題冊子は持ち帰ること。

一

次の文章は、吉本隆明著『定本 言語にとって美とはなにかⅡ』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合上、本文の一部を改めたところがある。(40点)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(注) ○能記……スイスの言語学者、ソシュールの用語。シニフィアン。言語を表裏一体の二面性のある記号としてとらえたと
き、音もしくは文字に対応する。○所記……能記と対をなす。シニフィエ。意味に対応する。○杳……暗くてはつきり
しないさま。はるかに遠いさま。○フロイト……精神分析学の創始者として知られる。一八五六―一九三九。

問一 傍線部①～⑧のカタカナを楷書の漢字に改めよ。

問二 本文中の

A

・

B

・

C

・

D

 に入るもつとも適切な語を、それぞれ次のア～エの中か
ら重複せず選べ。

ア 記号 イ 幻想 ウ 構造 エ 抽象

問三 傍線部Ⅰ「笛を吹けよ」について、なぜ筆者は、表現芸術の象徴である「詩」の中でも抽象性・幻想性を濃く帯びた作品（「牧歌」）のうち、この一行をとりあげたのか。筆者の意図をわかりやすく説明せよ。

問四 傍線部Ⅱ「この詩の場合フロイト的にいえば青春体験の記憶とでもいおうか」について、ここで用いられている文章表現上の効果としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から選べ。

- ア 挿喩　イ 強調　ウ 倒置　エ 隠喩

問五 二重傍線部「わたしたちは、言語が、機能化と能率化の度合をますますふかめてゆく事態にであっている」について、言語の機能化と能率化によって、どのような弊害があると筆者は主張しているのか。「指示表出」「自己表出」という語を用いながら、わかりやすく説明せよ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(30点)

そのころ、村上頼衡よりのひらの家人、埴科文次はにしなといふもの、心さま情け深く、武を学ぶ暇いとまには敷島の道を慕まほひ、軍陣の砌みせりにも陣所の風景おもしろき所にては、一首を作りて思ひを述べ、諸軍の興を催させけり。かかるやさしき男子おのこなりければ、人さらに悪あしくも思はず。そのころ、甲州の武田、信州の村上両家、争ひを起こし、陣を張り、戦ひを決す。あるとき、出陣のついで、開善寺の梅、今を盛りと聞こえしかば、文次、夕暮れ方、中間一人具して陣中を忍び出でて、かの寺に浮うかれ行きつつ、香をたづねて花にうそぶき、「南枝向暖北枝寒、一種春風有両般」といふ古詩を吟じける。月すでに山の端に昇り、花に映うつじてえならずおぼえければ、響き行く鐘の声さへ匂におふらむ梅咲く寺の入相いりあひの空

とうち詠じをるところに、このあたりには思ひかけず、見慣れもせぬ女性一人、女の童一人具して出で来たれり。年の頃二十歳ばかりと見ゆ。白き小袿こちまほに、紅梅の下襲したかまね、匂ひ世の常ならず。月にえいじ、花に向かひて、

ながむれば知らぬ昔の匂ひまで面影残る庭の梅が枝

と詠みて、しばしやすらひ居たり。文次これを聞くに、怪しみながら堪へかね、近く立ち寄りて袖を引きつつ、「今宵の月に光を争ふは、庭の梅のみか、君が姿と袖の香りも同じ心におぼえ侍り」なんと戯るれば、女さしも驚きたる色なく、「梅が香にいざなはれ、月にうそぶくこの夕暮れに、やさしき人に会ひ奉るこそ嬉しけれ」とて、しめやかにもてなしける気配、この世の人ともおぼえず。文次すなはち中間に仰せて、酒売る家をたづねさせ、酒買ひ求め、御堂の軒に座して、数杯を傾け、酔ひに和して語らひ寄りつつ、

袖の上に落ちて匂へる梅の花枕に消ゆる夢かと思ふ

と言ひければ、女返し、

II しきたへの手枕の野の梅ならば寝ての朝けの袖に匂はむ

と詠みて、互ひにわりなく契りけるが、数杯を傾けし酔ひに臥して、夜すでに明け方になり、東の空横雲たなびきければ、夢驚エき、眠り覚めて起き上がりしに、文次ただ一人梅の木のもとに臥して、女も女の童もいづち行きけむとも知らず。明け渡る空にむ

ら鴉からすの鳴く声ばかり、月は西に落ちて名残は我が身にとどまれり。(中略) 人ならばまためぐりも会ふべきに、これは疑ひもなく庭の梅花の妖精なるべしと、袂たもとに残る移り香の、さながら梅花の香りに違はぬぞ奇特なる。かくて、陣屋に帰りてもなほその面影の忘れ難く、夕暮れになればそぞろオに恋しく、涙の絶ゆる暇なし。

梅の花匂ふ袂のいかなれば夕暮れごとに春雨の降る

物あぢきなく、世に住む甲斐もありあけのつきせぬ思ひにくづほれて、こりつむ柴のなげきせむよりはとて、その次の日、うち死にしけり。

(『伽婢子』による)

(注) ○開善寺……長野県飯田市にある禪寺。早咲きの梅で有名。 ○中間……従者。 ○南枝向暖北枝寒、一種春風有兩般……

「南枝は暖に向かひ北枝は寒し、一種の春風兩般有り」と読む。「兩般」は二通りの意。 ○なんど……「など」に同じ。

○手枕の野……歌枕。 ○朝け……「朝」に同じ。 ○わりなく……愛情深く。 ○こりつむ……「樵せう」は切ること。

問一 傍線部ア、オの語句の、本文中における意味を記せ。

問二 波線部Ⅰの「同じ心におぼえ侍り」とはどういうことか。具体的に説明せよ。

問三 波線部Ⅱの和歌を通して、女がほのめかしていることは何か。本文全体を踏まえて説明せよ。

問四 二重傍線部に用いられている掛詞を具体的に指摘せよ。

問五 『伽婢子』は、仮名草子というジャンルに属する。江戸時代に成立した次の文学ジャンルのうち、最も後発のものを選び、番号で答えよ。

- ① 仮名草子
- ② 合巻
- ③ 黄表紙
- ④ 浮世草子
- ⑤ 洒落本

(余
白)

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で、返り点・送りがなを省略したところがある。(30点)

褚公、於章安令遷太尉、記室參軍。名字已顯、而位微、人未多識。公東出、乘估客船。送故吏數人、投錢塘亭住。爾時吳興沈、為縣令。當送客過浙江。客出、亭吏驅公移牛屋下。潮水至、沈令起彷徨、問牛屋下是何物人。吏云、昨有一儉父、來寄亭中。有尊貴客、權移之。令有酒色、因遥問、儉父欲食餅不、姓何等、可共語。褚因拳手答曰、河南褚季野。遠近久承公名。令於是大遽、不敢移公、便於牛屋下修刺詣公。更宰殺為饌、具於公前、鞭撻亭吏、欲以謝慙。公与之酌宴、言色無異、狀如不覺。令送公至界。

〔世説新語〕による

(注) ○褚公……東晋の官僚で後に外戚となった褚裒(三〇三〜三五〇)。字は季野。○章安令……現在の浙江省にあった章安

県の長官。○太尉……官職名。軍事担当の大臣。○記室參軍……太尉の補佐官である參軍の中で、文書記録を担当する

幕僚。○估客……商人。○送故吏……見送りの役人。○錢塘亭……名勝として知られる錢塘江のほとりにあった宿。

○吳興沈……現在の浙江省にあった吳興郡出身の沈某。吳興郡の沈氏は名門として知られていた。○浙江……錢塘江のこ

と。 ○潮水至……銭塘江は毎月初めと満月の頃に川の流れが逆流する現象で知られていた。 ○昨……昨晚。 ○僮父……いなかもの、いなかのおやじ。 ○修刺……名刺を出す。 ○宰殺……牛や羊を屠^ほる。 ○饌……誰かに捧げる飲食物。 ○鞭撻……鞭で打って。 ○謝慙……恥じ入って詫^わげること。

問一 傍線部 ① ～ ④ の読みを、送りがなも含めて、すべてひらがなを用いて現代かなづかいで記せ。

問二 傍線部 A について、すべてひらがなを用いて、現代かなづかいで書き下し文にせよ。

問三 傍線部 a ・ b について、それぞれの発言の始まりと終わりの漢字二文字を文中から抜き出せ（返り点・送りがなは省く）。

問四 傍線部 B について、

- (1) 「之」が指しているものを文中から抜き出せ。
- (2) なぜこのような行動をとったのか、その理由を簡潔に説明せよ。

問五 傍線部 C について、このように慌てた結果、この人物がとった行動を簡潔に説明せよ。

問六 傍線部 D について、適宜言葉を補いながら現代語訳せよ。